

## 第3回環境被害に関する国際フォーラム

---

### セッション1 被害の現状報告

#### ヴァバシムーンのこれまでと現在

マーヴィン リー マクドナルド\*

カナダ先住民 ヴァバシムーン代表

---

#### はじめに

ボージュ (Boozhoo, アニシナベ語でこんにちは)。

まず私自身のことを紹介したいと思います。今回このように招へいを受けまして熊本、水俣に参りました。大変光栄に存じております。

私は私のコミュニティを代表して今日ここでお話するんですが、実は私たちの長が今回どうしても来ることが出来ずに、私に話をせよということで、これまでも熊本にも日本にも何回か参っておりますので、ここでお話することを大変光栄に、また嬉しく思っております。

私はリトルウルフと呼ばれています。私の名前です。私はカナダ先住民の一つの部族から来ています。今日は私が住んでいるコミュニティの話を皆様にしたいと思います。

少し歴史をさかのぼってお話します。1873年、カナダ政府と先住民との間で第三条約が結ばれました。いくつもの条約が結ばれています。その交渉の中で、カナダ政府が我々先住民に言ったことは、「太陽が輝きそして自然がこのままである限りこれは続くものである」という説明でした。そして数年後、さらに別の条約も結ばれています。

私の祖父についてお話をします。私の祖父は1903年に生まれました。彼は伝統的な暮らしをしておりました。もちろん狩猟であるとか魚を獲ったりとか様々な我々の伝統生活をしておりました。

私は長老にこれまでに起きてきたことをどのように感じるか、と問いかけたことがあります。その長老の女性が、次のような伝説を話してくれました。

ワンマンレイクという集落がありますが、このワンマンレイクの精霊が河川を守る守護神

---

\*ヴァバシムーン（かつてホワイトドッグとよばれたカナダ・オンタリオ州の先住民居留地）に生まれ育つ。ヴァバシムーン（Wabaseenmoong）は先住民コミュニティ（Indian Reserve）の一つ。正式には、ヴァバシムーン独立国（Wabaseenmoong Independent Nations）と呼び、オンタリオ州の西部に位置する。この居留地はイングリッシュ・ワビグーン水系に位置しており上流のドライデン市にある製紙工場が流した水銀に汚染されており、1975年より原田正純医師および熊本学園大学チームによる継続的現地調査によって水俣病が発生していることが確認された。1986年に先住民組織、州政府、製紙工場の三者で交渉が妥結し、一定の補償がされるようになった。報告者のマクドナルドさんも被害者の一人。かれは現在、イングリッシュ・ワビグーン水系の水銀汚染の浄化と環境復元のための委員会の委員を務めている。

なのです。ある日、一人の女性とその娘が魚をとる網を仕掛けていました。その時、男がカヌーを漕ぎながら近づいてくるのが見えました。そして女性二人が彼に挨拶をしようと振り返った時に、その男は水の中へと消えていきました。精霊だったのでしょうか。

私たちはそのワンマンレイクに住んでいました。でも今はもう誰もいません。ここでは1950年に洪水が起こり、そして1960年には河川の汚染が広がるようになってしまった。そして、今は、ほんの数名の私達だけがここで祝い事をしたりお供えをワンマンレイクの精霊に対して行っているだけです。

ヴァバシムーンは「ワンマンレイク」、「ホワイトドッグ」、そして「スワンレイク」と三つの集落から成り立っていますが、みんな川に住んでいる民です。私はそのことについてお話をする前にまず先ほど言いました1950年の洪水について一言ご説明したいと思います。

私の母の話をします（写真1）。私たちはみんな「川の人」と呼ばれ、川を生活の中心において暮らしています。母が若い時には、この川は全て美しく、その水を飲んだり、魚を取ったりしながらの生活がありました。しかし、この洪水のために、ものすごい汚泥が流れ出して、もはや川の水は全く美しく清潔ではなくなってしまいました。私たちはまた、農業を営む民でもあり、野菜を育て、あるいは狩猟し、そして川で魚を取って生活をしているのですが、この川の洪水が起きてしまったがために、私達の伝統生活が壊されるはめになりました。私は、母が話してくれたことをしっかりと覚えていますが、私たちは皆同じ仲間としてその話を大切に暮らしています。



写真1 私の母

## 私たちの村の暮らしと水銀汚染

私達は河川の汚染と水銀被害をひきおこした製紙工場を訴え、一定の補償も受けましたが、決して十分なものではありませんでした。この被害は45年前から起きているんですけれども、まだ現在もこの状況が続いていると言わざるを得ません。部族の仲間達の何人かはカナダの医者によって検診、検査を受けて、そしてこの水銀中毒による症状が出ているということで補償を受けました。

この水銀中毒については、州政府によって予防し、被害が起らないようにするという施策が行われました。イングリッシュリバーという所では、商業的な漁業の禁止措置がとられました。そのエリアではウォールアイという魚（スズキの一種の淡水魚）がよくとれるのですが、これは我々にとっては主食と言えるほどの大事な魚であります。しかし、漁獲禁止がまだ出たままなんです。

私たちの仲間達は、川に関わる仕事をずっとたくさんしてきました。例えば商業的な漁業ばかりではなく、休暇用の別荘（ロッジ）などの清掃、川沿いで荷物の上げ下ろしなどもありますし、釣りのガイドとしての仕事もありました。さらに動物を捕える罠を仕掛けたり狩猟をしたりなどいろんな仕事に関わってきました。

ところが、水銀汚染が発生し、漁業が禁止されました。このことを聞いたアメリカ人達が来なくなった。それまではアメリカなどから来る人達がたくさんいたんですけれども、その彼らのツーリズムが全く下火になってしまいました。

これはまさに、会社の水銀の排出が作り出したことでした。漁業が出来なくなった。これは、この地域にとりましては重要な産業、重要な仕事を失ってしまう、ということを意味していました。

45年が経過し、その間ほとんど何も、この問題を解決するための事が行われてこなかったのですが、2017年の12月、一つの法律、被害と損害を修復するための基金に関する法律がオンタリオ州で通りました。

我々のリーダーがいろいろと交渉をしているんですけれども、政府の人間と、それから公害を起こした会社の人間が一つの車に乗って私達の所にやって来ました。そして同じテーブルについて話を始めます。それは私達にとってはまさに巨大な力との戦いであります。

イングリッシュ・ワビグーン・リバーの修復に関する法律についてちょっとお話をしたいと思います。この法律は川を修復するためにお金を投下するという事なのですが、実際にはそんなこと出来るはずないと私は思っています。実際に8,500万カナダドル（約65億円）というお金がその修復のために準備されることになりました。

私のコミュニティと、姉妹関係にありますもう一つの部族（グラッシーナロウズ）と一緒にこのパネル委員会に出席していました。そこでは、実際にイングリッシュ・ワビグーン川の水銀だけでなく、他の汚染物質に関しても議題に上っていました。議題の中に河川の浄化事業があり、本当に記念すべきものであります。それが実現して、安全であるならば、大変記録的なことになります。その法律には魚をいかに安全に食べるかという指導もあります。例えば安全レベルや食べてよい魚の量でありますとか、病人、あるいは妊婦さん、小さい子供達がどのぐらいの量までなら食べてもよいか、そういうようなことの記載もありました。

水銀の汚染が実際に起きているのですが、ただ魚を常食していた人達にとっては、魚を食べないということは大変深刻な問題になります。なによりもまだまだ私達の生活にとって、この魚というのが主食であるわけですから。

私の妻と私は、写真の中の若い女性、姪ですけど育ててきました（写真2）。小さな男の子が写真の中で見えますか？ 前回、熊本に来た時にこの男の子は生まれたんです。私が日本にいる時に、このフォーラムで話をしていた時か、あるいは空港にいた時でした、私の娘がこの子を出産しました。そしてもう一人の娘が昨日、出産致しました。私が日本に来るたびに孫が増えていきます。今現在9人孫がおります。

私の娘は水銀の中毒による健康障害で補償を受けております。補償を受けるよりもっと

健康な体の娘でいて欲しかったと思います。娘は、2歳になる位まで歩くことができませんでした。今でも特徴のある歩き方をします。出来るだけ普通に歩けるようにということで、彼女の靴に特別な装具をつけています。私たちのところでは子供はボーイスカウトやガールスカウトに参加することが多いのですが、娘がガールスカウトに参加していた時には、長時間立ち続ける事も出来ず、大変難しい時を彼女は過ごしていたと思います。



写真2 姪と孫

彼女の顎の線といいますか、独特な形をしています。喜びを表現したい時に、彼女はなぜか発作のような状態になってしまいます。また何か嬉しい事がある時には、指を動かすような動作を示します。彼女には、まわりの雰囲気が変わっていくという事が、とても難しい状況を引き起こすわけです。彼女は難聴で、聞く力があまりよくありません。

母が私に、何か悪いことがたくさんあっても、出来るだけよい面をとらえていこうと教えてくれていました。以前、ハロウィーンの時に、変装をして子供たちにトリック・オア・トリートをさせたということがありました。彼女に水銀のことをどう思うかと尋ねたことがあるのですが、とにかく息子にこれが引き継がれないように、それを強く願うという答えでした。これ彼女、娘と子供の写真ですけども、大変大事な写真なんですね。

私たちの民にとりましては、政府の人達との様々な交渉は戦う様な状況になってしまいますけども、それを乗り越えていくというのは、大変難しい困難な事なんです。

先ほど話した私の母なんですけれども、その写真です。たぶん私と似ているのがお分かりになるかと思います。母の言葉ですけども「水銀というものが私たちの川で発見されるもっと前、私の家族と私の先祖達は自然と調和した暮らしを続けていました。地球というのは私たちの家であり、私たちはその地球を再生させなければいけません。ただその再生にはかなり長い年月が掛かります。でも私達は、私達の母である地球をきちっと見ていくことで、母である地球は私達の事をまた守り、きちっと見てくれる。」

ところで水系の水銀に関してですけども、洪水を防止するという理由で上流にダムと水力発電所が作られます。私たちのコミュニティの北の方になるんですけども、その水力発電所が出来ること、また他の汚染物質もこの地域に流れ込んできています。

## 失ったものと将来への希望

数年前ですが、私、熊本に参りまして水俣にも参っております。水俣病で苦しんでいる方達と会うことが出来ました。私はその人達と握手をし、病を抱えている人達と共に語り合う



ことができました。

私の母もやはり水銀中毒の症状を持っており、補償は受けています。私にとっては、家族の苦労を話すのは大変苦しいことです。でも私は出来る限り物事のよい面だけを見ていきたいと思っています。本当によい側面があるのならば、そこだけを見ていきたいと思っています。しかし、「進歩」「発展」という名の元に私たちはおおくの犠牲をはらい多くのものを失いました。

私達の方から頼んだわけでもなく、私達は汚染や環境破壊についての説明を受けたこともなく、とにかく何も知らされずにおりました。私は今、林業といいますか、木を切ったり、あるいは植林をしたりという仕事をしています。またかつては、漁師もしていましたし、フィッシングのガイドとして働いていたこともございました。また私のコミュニティで、木や動物が大切にされるようにと、自然保護の活動もしています。そして現在、先ほど申し上げましたイングリッシュ・ワビグリーン・エデュケーション・ファンド・アクトのパネルのメンバーとして仕事をしておりまして、コーディネーターとして、とにかくより良い河川を取り戻すという業務についています。

今日、皆様にここで私の話をお聞き頂いたことを大変嬉しく思います。カナダそして私たちの地域では、人に話を聞いてもらうということそのものが、なかなか難しい事なのです。原田先生始めたくさんの方々が日本から来て、いろんなことを明らかにしていられました。そしてそうした尽力によって、ようやく、私たちの目を開いたのです。45年も経って、初めてここで、カナダも日本と同じように、オープンにしていかなければならないという所に気付いた段階です。

私達の暮らしの環境はかなり変わってきているんですが、私達の生活そのものは、やはり過去の暮らしに従った形で日々の暮らしを送っております。魚を食べます、魚を獲ります。私自身18歳の時に初めて仕事を持ったのですが、それはリード製紙工場（汚染源となった企業）の新しい工場を作る際の仕事でありました。それが良かったのか、悪かったのか、ちょっと私の中では分かりません。その時18歳でしたから、水銀汚染の元となった製紙工場のために働いたということが良いことだったのか、馬鹿げたことだったのか、当時、私にはそこまでの思いはなかったのです。

これまでの生活はよい生活が出来てきたのかなと思うんですが、実は若い時に、誰かが私の所にやってきて、髪を切って毛髪を採取していきました。その後、何も連絡もなく、その髪の毛がどうなったのかも分かりません。私の所に来て髪を切っていた人間は知っておりますけど、おそらくオンタリオ州政府からの人だったんでしょうけど。じゃあその後、その髪がどうなったかっていうのは、全く知らされておりません。

皆様お忙しい中を、このフォーラムにご参加頂きましたことを、心から感謝申し上げたいと思っております。私を始め、いろんな地域からの代表者の話を、皆様にここで聞いて頂きました。まだこれから続きますけれども。本当に私達にとって素晴らしい機会が得られたと感謝しています。

ありがとうございました。メグウィッチ Megwatch,

#### 参考文献

- ・ 原田正純、花田昌宣、田尻雅美ほか「カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染－カナダ水俣病の35年間」『水俣学研究』第3号、熊本学園大学水俣学研究センター、2011年。
- ・ 水俣学研究センター編『水俣からのレイトレッシン』熊本学園大学水俣学ブックレットNo.9、熊本日日新聞社、2013年。